Lesson 243

発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

社会教育との出会いを振り返り、現在地を確認する

安西 春樹

提案：皆さんの「社会教育」との出会いはいつでしたか？社会教育との関わりを振り返り、ご自身の現在地を確認してみてはいかがでしょうか。

【誰もが社会教育に関わっている？】

「社会教育」「生涯学習」との関わり方は人それぞれです。誰もが日常の中で、日々何かしらの「学び」を得て生きていることは間違いありません。

では、特に「社会教育」との関わりを考えたとき、人は次の3つに分けられるのではないでしょうか。

①自覚を持って社会教育と関わっている
②無自覚に社会教育的な関わりを持っている
③全く社会教育的な関わりを持っていない

広義と狭義の定義を考えると明確な線を引くのは困難ですが、大半の方は②に当てはまるはずです。例えばＰＴＡ活動や市民サークル活動、行政の各種講座に参加している方（市民）など、「社会教育」という言葉になじみはなくとも、無意識に社会教育活動の実践のただ中にいる方がほとんどです。

また、直接的に他者との関わりが少なかったとしても、趣味やライフワークを通じて、メディアやネット、書籍などの媒体から影響（学び）を受け取っている方も多く、これも関わりの一端と言えます。

狭義で言えば③に該当する方も一定数いるかもしれませんが、端から見れば社会教育的な活動に足を踏み入れているケースは少なくありません。

自分事として考えると、私自身は公的社会教育の分野を職業としているため、必然的に①となります。

今回は、私が「社会教育」と出会ったきっかけを振り返り、現在の立ち位置に至る経緯をときほぐすことで、自分にとっての「社会教育」を見つめ直してみたいと思います。

【社会教育との出会い】

私が「社会教育」に出会ったのは、大学で履修した社会教育主事課程でした。それまでは「社会教育」という言葉すら聞き覚えがなく、履修したきっかけも教職課程や学芸員課程を履修する際の〝おまけ〟のような意識でしかありませんでした。

在学中、最も大きな意識の変容があったのは「社会教育実習」でした。

当時地元であった東京都練馬区の知的障害者青年学級に1年間実習生として参加したことが、私にとって初めての現場でした。実習終了後も当時の社会教育主事の方にお声がけいただき、ボランティアスタッフとして関わ

26-11_64-66連載発想する.indd　64　2026/10/05　15:17:46

るようになり、現在でも細々とですが関わり続けています。

この出会いが、公的社会教育の仕事に就く直接の転機となりました。当時はまだ理念としての社会教育も自分の中で曖昧で、「ボランティア活動の実践」という感覚が強かったものの、後に行政の担当者として障害者青年学級に関わる際の大切な下準備になっていたと感じます。

【学び合いの実践】

仕事に関わる中で最も影響を受けたのは、約25年前の同業者（仲間）との出会いです。

当時、社会教育指導員として着任した1年目に、東京都教育庁主催の「社会教育関係職員初任者研修会」に参加し、他自治体の同期たちに出会いました。

所属も担当事業も異なりましたが、「非常勤専門職員の1年目」という共通点だけで意気投合しました。

もともと社会教育指導員制度は、社会教育主事を補う目的で昭和32年に東京都教育庁が各区へ配置したのが始まりです。昭和40年代に各区へ任用の移管が進み、国庫補助事業での運用を経て、現在は全国的に各自治体の独自裁量で設置がされています。

私が採用された当時は校長職OBの方が大半で、大学で社会教育を学んだ若い世代が少しずつ就任し始めた時期でした。研修で出会った仲間は私を含め任期5年の非常勤職員であり、職務上の疑問や相談事の他、雇用への不安や将来の悩みまでも共有し合いました。

その後、私たちはプライベートで何度も勉強会を開きました。仕事ではないからこそ時間を気にかけず真剣に議論しつつ、お互いに切磋琢磨ができるいわば自主的な研修の機会となっていました。また「あそび」の要素があったからこそ、学ぶことも多かったと感じます。

例えば、自分たちの思いや拙い実践を冊子にして同業者に届けるため、青年の家で合宿をし手作業で印刷・製本をしたり、任意団体であった東京都社会教育指導員会の役員を買って出て、会の刷新を図ったり、お互いの事業の裏方をお手伝いしたり。時には社会教育職員の力量形成について夜通し議論することもありました。

今思えば少々強引で、身の程知らずな面もあったかもしれません。しかし、同じ境遇の仲間とともに「学び合いの場」をつくれた体験は、今も私の職務を支える大きな糧となっています。

【どこにいても社会教育とつながっている】

その仲間たちも、今では社会教育主事、民間企業の社員、研究者、社会教育施設の指定管理者など、それぞれ別々の道を歩んでいます。しかし、先日久しぶりに再会した際も、根底に「社会教育」への思いを持ちながら仕事や活動を続けていることが強く確認できました。

本連載の前回・前々回で佐藤さんが「部署が変わっても、社会教育で大切にしてきた姿勢とつながっている」とおっしゃっていた通り、「どこにいても社会教育」という感覚は、私たちに共通する軸となっています。

【多角的な視点を持つために】

同業の仲間の存在は、自身の仕事を進める上でも大きなヒントを与えてくれました。

職務上の企画や講座の運営で行き詰まりを感じるとき、外部の情報や他地域の事例に触れることが突破口になります。

例えばボランティア養成講座など、他地域での先例や当事者の声を聞くことで、環境や手法が違っても多くの気づきを得られます。視野を広げ、新たな可能性を見出すためにも、「外からの視点」を意識することが重要

26-11_64-66連載発想する.indd　65　2026/10/05　15:17:46

です。

外の視点を得るためにも、自身の原点を振り返り、出会った人々の言葉に耳を傾け、新しいつながりをつくり続けることが大切だと感じています。

【あなたのきっかけは?】

同業の仲間との出会いは、私にとって非常に大きなものでしたが、他にも、市民の方々、学習講座の講師、施設や団体の職員の方々、同僚・上司・他部署の職員、もちろんこの連載に関わる方々、沢山の出会いがあり、常に学びをいただいてきました。**ひ**ととの出会いは、**よ**ろこびであり、**こ**れまでの自分を成長させてくれる原動力になります。

色々な出会いを振り返った時、今の自分の立ち位置が確認できるように思います。また、効率化やコスパ、タイパがもてはやされる時代ですが、回り道や偶発的な出会いから学びを得ることが多かったと気づかされます。様々な人との出会い、コミュニケーションを面倒と思って嫌悪しては後々損をするかもしれません。あそび心を持って、真剣に学びと向き合うことが大切だと振り返りの中で感じました。

では、社会教育に関わるあなたの「きっかけ」は何ですか?また、この雑誌『社会教育』を手にとった理由は何でしょうか。秋の夜長に、これまでのご自身の歩みを少し振り返ってみませんか。

次号の「発想する!授業」は尚絅学院大学の松田道雄さんからお送りする予定です。お楽しみにしてください。

安西春樹
(あんざい・はるき)
中央区区民部文化・生涯学習課
総括生涯学習指導員

26-11_64-66連載発想する.indd　66　2026/10/05　15:17:46